

---

# とある転生の情報屋

A A A

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある転生の情報屋

### 【Nコード】

N3283Q

### 【作者名】

AAA

### 【あらすじ】

転生したというより憑依にちかい  
書きたくて書いた  
ただそれだけ

## 転生した情報屋

俺は山本竜。

都会の真ん中で情報屋をしていた。

客は一般、ヤクザ、ちよつとアレなやつといろいろ相手をしてきた。  
ある日、一人の客がやってきた。

「聞きたいことはなんだ」

「一つ・・・x x xのx x xをしってるか？」

なんだ、そんなことかと思いい口を開いた。

「ああ、知っている。いくらだs・・・」パァン

撃たれた。知られてはいけないものだったらしい。

あっけなく死んだ。

まあ、つまらない人生よりましな所に生まれ変わりたい。  
そう思つて目を瞑つた。

目を開いた。

俺は生きていた。

つまらない。

またただ情報を集める仕事にもどるのか・・・  
だが、きずいた。  
ここはどこだ？

病院ではない。青空が見える。  
端には風車が見える。

ここはどこなんだ？

頭に情報が流れ込んだ。

なぜだかわからない。

そして一つの答えにたどり着く。

「とある魔術の禁書目録」

思わずわらった。楽しくなりそうだから。

## 情報と確認

とある魔術の禁書目録を知っている。

暇になりたまたまてに取った本。

客が忘れていった本。

簡単に言うとはまった。

自分の暇つぶしにはもってこいのもの。

そして、今。

「情報が頭に流れ込んでくる・・・」

山本 龍

職業：情報屋

能力：元素使い

範囲：18・6m

最大：5600t

レベル6

能力者。

しかもレベル6

世界でただ一人

おもしろい。

ここは学園都市。

原作はじめての10年前。

俺は今、21歳。

とりあえず情報をあつめよう。

夕方。

そこのスキルアウトをかつ上げて、12万。

なぜかあとから自分の財布をみつけあわせて120万ちょっと。

ひとまず家を借りた。

家というよりオフィス。

ひとまず寝た。

疲れたから。

翌朝、どんどんとなにかなっていた。

そして「家からでるな」と注意報。  
窓からみた。なんなんだと。

そこには戦車。  
重装備した人。  
狙われた少年。

正直ラッキーと思った。

「メツケ、一方通行。」

一方通行だった。

自分は窓から飛び出した。  
室素を足場として歩道橋へ歩く。  
誰かが騒いでるが関係ない。  
そして白き少年の前に座り込んだ。

「オイ、小僧」

「・・・誰」

無視した。

聞きたいことを聞くために。

「友達・・・いや・・・」

少年に聞いた。

「家族は欲しくないか？」

## 一方通行

簡単にいうと拉致。

難しく言う少年抱えて逃げた。

さらに難しく言う歩道橋、地面と元素分解をして土にもぐった。  
そしてオフィスに戻った。

「さて、いつつー君」

「いつつー？」

「一方通行だからいつつー」

「・・・そう」

オフィスにはテーブル、イス、ベッド、PCだけおいてある。  
それしか買えなかった。

PCを付ける。

画面にはグラフ。

すなわち株。

情報をPCで調べた。

そして株を予想。

そして賭けた。

そして寝た。

10年たつまでこんな毎日。

おもしろくなるための土台。  
すなわち金。

10年で11けたの金をあつめた情報屋の話。

ただそれだけの10年の話。

10年

3年。

アパートを買った。  
部屋数、15。

4年。

暗部を手に入れた。  
嘘つきはいなかった。

6年。

少女を助けた。  
数は4。

7年。

嘘つきがきた。  
スキルアウトのボスもきた。  
幻想殺しもきた。

8年。

白い少年が家に帰らなくなった。

9年。

家の裏に喫茶店を開いた。  
2階は情報屋。

10年。

原作が開始された。

部屋ではちばちとキーボードをたたく。

レベルアップの噂。

デュアルスキルが存在。

能力を打ち消す能力。

すべてを知る情報屋。

「上条当麻。原作開始。俺は部屋で情報探し……楽しくなり  
そうだ。」

そして上条当麻が悲鳴を上げた。

## 開始された原作

悲鳴。

想像するに、原作が始まった。

アパート2階203号室。

白いシスターにかまれていることだろう。

なら魔術師が来る。

ここは俺のアパート。

すなわち、我が家。

壊されては困る。

そして離れの喫茶店から離れた。

「神崎。例の情報屋は不在だった。2時間前インデックスの「歩く教会」の反応が途絶えた」

「わかっています。最悪の場合情報屋に聞こうと思いましたが、不在ならしかたありません」

「さて、君はそつちをたのむよ神崎」

「わかりました。スタイル。頼みますよ」

「わかつているさ」

そうして情報屋の前から離れていく。  
目当ての人物はすぐそこなのだが。

そして、上条が帰宅。

「インデックス！大丈夫かつ！？誰がこんなことを・・・」

「ん？僕たち魔術師だけど？」

上条の背後、すぐ後ろ5mほどさきに立った赤服の男。  
ステイルⅡマグヌス。

「さて、面倒になる前にかえってもらえるところらしいんだが、魔術師」

さらに後ろに茶髪の男。

「誰だ！？」（気配がまったくなかった。誰だこいつは！）

「かつ、管理人！」

「で、かえれといったが聞こえたか？なんだそのバーコード。コン

「B-2の商品か、君は」

「帰る理由がないのでお断りするよ……そしてこれはお洒落だよ、君」

「面倒だ……落ちれ」

「はぁ？ なっ!?!」

足場が崩れ落ちていく。  
そして足場が再生した。

「上条君」

「えっ？ あ、はい!」

「そのこの手当てよろしく」

そうして山本龍も落ちていった。

「さて、魔術師。帰らないと実力行使になるんだが？」

「ふん。お断りするよ、能力者」

「あっそう。面倒だから寝てろ」

酸素。

人間に必要不可欠の元素。

それを魔術師の肺から5割ほど抜いた。

魔術師は倒れる。

「タバコを吸ってなかったら絶えられたかもな」

そして魔術師を担いだ。

「重いな。俺には力仕事は向かないんだが……」

「ごみ捨てにでもいくかな」

翌日、魔術師はゴミステーションで夜を空けた。

次は、神崎。

聖人か……。

家でもないし、かまうことはないだろう。

さて、客だ。

「で？なにを聞きたい」

「三沢塾について」つ……

面白い。

そう、思い異国の人間に答えた。

「……いいだろ。」「い……」

## 三沢塾

3日前、樹形図の設計者が謎の光線により破壊された。  
だがこっちにとっては好都合だ。

情報が手に入る。

すなわち俺が儲かる。

同じころ外人に三沢塾について情報を聞かれた。

三沢塾。

あまりにも大きすぎる塾。

そこにローマ正教を離反した人物が立て籠もってるという。

アウレオルス「イザード」。

なんでも言葉のままに歪められるという。

面白い。

敵には回したくはないが……

仲間にはもってこいの人間だ。

翌日。

今、三沢塾前にいる。

三沢塾の情報のかわりに同行させてもらった。  
だがこいつがいる理由がわからん・・・。

「なぜ、君がいるんだね。見てるだけでイライラするよ・・・」

「なら、見なければいいだろう。イライラしても俺は関係はない」

「ええと、なぜ上条さんはここにいるんでせうか？」

三者三様として三沢塾へと入っていった。

俺は今、一階にいる。

ただ連れてけといたので守ってくれたりはしないそうだ。

魔術師は『僕の邪魔だけはするな』といって幻想殺しとってしま  
った。

暇だ。

やっぱりついていけばよかったか。

2時間ほど三沢塾内をたんと歩いていった。

途中塾生徒と出会い魔術で攻撃されたが意味はない。

元素で分解すればいいのだ。

すなわち無視した。

そして何階にいるのかもわからず隠し扉にたどり着いた。

「ドンパチやってるようだな。面白い。」

そう言い、隠し扉をくぐった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3283q/>

---

とある転生の情報屋

2011年1月26日08時12分発行